

英雄 《竜殺し》 の誕生

戒能靖十郎

Seijuro Kaino

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

口絵
挿画
ミユキルリア

地図
平面惑星



目次

プロローグ	緋の風塵	11
第一章	獣たちの日常	27
第二章	竜の地にて	69
第三章	《傭兵王》の帰還	97
第四章	決闘	120
第五章	黒き狼の咆哮	160
最終章	英雄	191
エピローグ	誕生	238
あとがき		253



登場人物紹介

ドヴォルグ・サイドライド
団長《傭兵王》



副団長
ヴィオ・ロランス

アルズレッド・リーイン
部隊長《黒狼》



ミアン



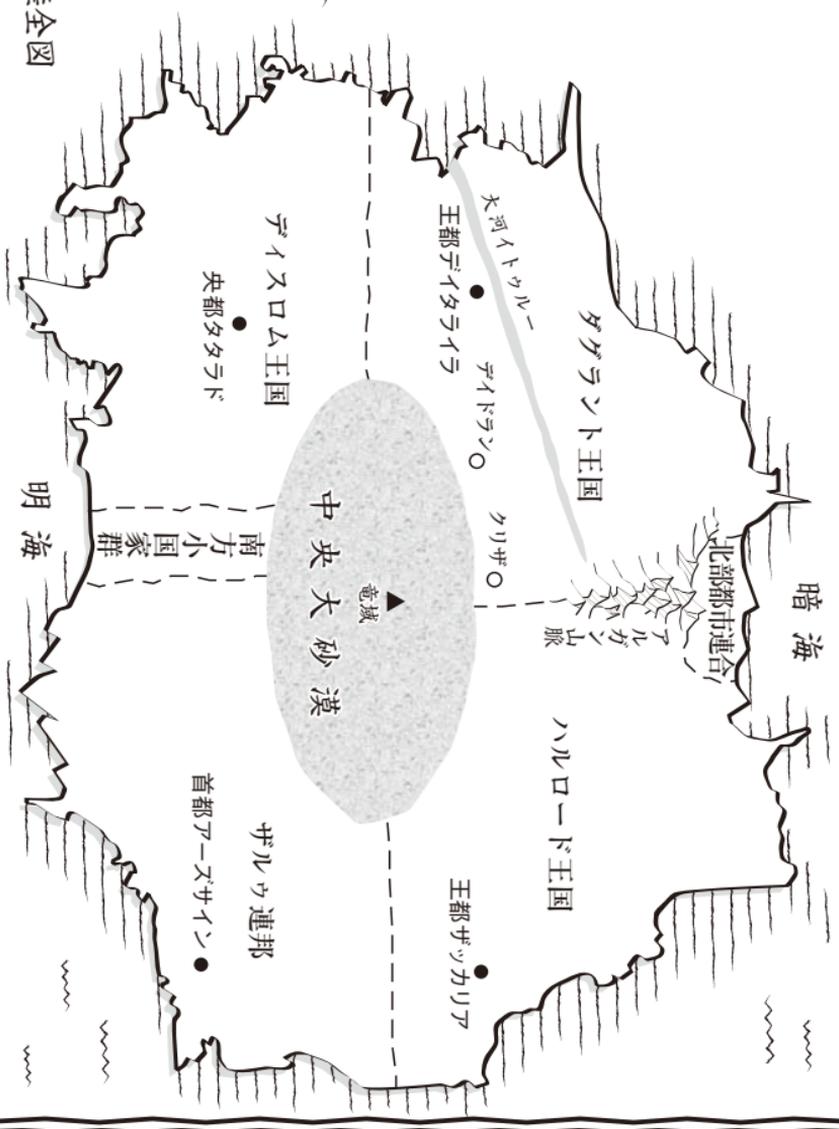
少年



サイム
小隊長



フオトキア大陸全図



暗海

北部都市連合

ダグラント王国

アルガン山脈

ハルロード王国

大河イトゥルー

王都ザツカリア

デイスロム王国

首都タタラド

中央大砂漠

竜城

南方小国家群

ザルウ連邦

首都グーズサイン

明海

南方小国家群拡大図

中央大砂漠



デイスロム王国

ザルウ連邦

大河ハアウト

明海



英雄《竜殺し》の誕生

「……これは？」

「おれが生まれたときからもっていた、たった一つのもんだ」

「ああ、なるほど。ほくとおなじだね」

「こいつをやる。だからそれを——お前のもっている大切なものをよこせ」

「大切ではないよ。ただ、ほくはこれしかもっていないんだよ」

「だが、おれはもっていない」

「こんなものをもっている、意味なんかないよ」

「そいつはおれが決める。おれはこれをやる。だから、お前のそれはもらう」

「……いいよ」

「よし、契約成立だ」

プロローグ 緋の風塵

戦場には、独特の空気がある。

たとえばそれは、風に混ざる血の臭い。

たとえばそれは、どこかでひびく蹄鉄ていとう。

たとえばそれは、きりきりと鳴る弓弦ゆづる。

すべてが溶けあい、一つの世界をつくりだす。

(ああ……いいな。たまらない)

森にひそみ、草むらに身を伏せて、手の甲を這は

ずる虫に目をやりながら、彼は思う。

(要するに、おれはここが……戦場が好きなんだ)

かく握にぎった右手に、ほんの少しだけ力をこめる。

なによりもたしかなものがある。それだけで、

自分がどこまでも駆けぬけられると信じていることがで

きる。

深い森の、むせかえるような緑の臭いが彼を包み

こんでいる。ふりあおぐ空は、木々にふさがれ木漏

れ日しか見ることができない。視界にあるのは、う

ねりながらどこまでも伸びていく木の根の群れと、

はるかかなたまでつづく木立ばかり。

それがこれから、戦場になる。

愛剣を握り、声をひそめ、息を殺して、その瞬間

を待つ。

(最高の時間だ)

無数の小国家が争いをくり返し、戦いの神に魅入

られたと噂うわさされる戦乱の地——南方小国家群。

その地で、いままた、一人の男が戦場に立とうと

していた。



傭兵団『緋の風塵』第一部隊長、アルズレッド・リーイン、あるいは「黒狼」。それが彼の呼び名である。

歳のころは二十歳をわずかに越したばかりといったところ。呼び名の通りの黒髪と黒い瞳を備えており、彼を知る者は、みな口をそろえてその瞳を特徴として挙げる。

黒瞳黒髪はこの地方では珍しいものではない。だがその漆黒の狭間から漏れる輝きはまるで極天の星のように強く、見る者の瞳を心ごと射貫く。肩の下まで伸ばしたものがほうほうにはねたひどい癖毛もまた、獣のような種々の美しさを感じさせる。

すらりと伸びた長身は一見すると瘦軀にも見えるが、それは均整のとれた伸びやかな四肢の印象が、鋼の糸を束ねたような筋肉を隠しているからだ。

わずかに吊りあげられた口元からのぞく歯は獣の牙のような獠猛さをうかがわせ、一方で腰にさげた剣の柄をおさえる右手の所作は落ち着きに満ちてい

るが、それすらも爪の鋭さを隠すための野性の本能を感じさせる。盾も兜もつけず、鎧すら身にまとわないそのいでたちからは、自信がにじみでている。

「黒狼」という名がこれほど似合う男もいない」と、仲間のだれもがいう。

アルズレッドの隣には、大きな目と赤ら顔が猿を思わせる小男が、おなじように身を伏せている。二人が仲間であることは一目見ればだれにでもわかるだろう。なにせ二人とも、おなじ上着をつけているのだ。

深い緋色に染めあげられたそれは、傭兵団『緋の風塵』の特徴となる団服だ。革も金属もちいさないその意匠は戦場での有用性を求めたものではなく、平時での治安維持——ありていというならば民衆への武力示威——を目的としたザルウの軍服に近い。手首まで届く袖と、腰の下にまで達する長い丈は、見る者に一つの印象を与える。

すなわち、「暑苦しい」。

南方小国家群は、温暖な地だ。小国家群内でも北と南で多少の差があるとはいえ、冬の一部の時期をのぞいては、総じて袖の長い服は好まれない。鎧兜を身につけることの多い戦場にこのような上着を羽織おつてくる者など、普通はお目にかかれまいだろう。ましてや、いまは春のはじめだ。

しかし二人は上着をきつちりと身につけ、アルズレッドにいたっては第一ボタン以外をとめている。その律儀な服装は、奔放な獣のような瞳や髪とはまるでそぐわず、ちぐはぐな印象を与える。

小男のほうはといえば、ボタンは一つもとめず、だらしなく前をひらいているが、代わりにその下に革の鎧をつけている。いずれにせよ、見るからに暑苦しいという印象は変わらない。

彼ら『緋の風塵』第一部隊は、ダツとバースロン、二つの小国の争いに参戦しようとしているのだ。

ダツとバースロンのあいだには平野がある。両国の軍隊はそこで睨にらみあい、一進一退をつづけている。

兵数はともにおよそ二千。兵の練度にも差はなく、決め手に欠ける戦いは、このままでは侵略側であるバースロンの撤退で早晩幕をおろすことになると思われていた。戦線が膠着こうちやくすれば、兵站へいたんの安定した守備側が有利となる。

そこでバースロンは傭兵団を雇い、大軍の通れない山道からダツの王都を襲撃するように依頼した。王都が混乱に陥おちれば兵站が途切れ、物資は行き届かなくなり前線は崩くずれる。少数部隊で孤軍奮闘しつづけるのは、農兵ならばまず逃げだすような過酷な役割だが、これを断るような甘い傭兵団はいない。

バースロンの雇った傭兵団は、逃げ腰、ガーンひきの率ひきいる『天翔団』。総勢三百をかぞえる中堅規模の傭兵団だ。兵站を乱すどころか、単隊で王都を陥おとしかねない実力をもっている。この動きを察したダツは、もつとも信用のできる傭兵団に、山道で敵を止めるように依頼した。

そうしてこの戦場にてきたのが、アルズレッド

の率いる『緋の風塵』第一部隊だ。その数は、およそ百五十。

つまり、敵の半分しかない。

だが隊を率いる狼のような男にも、隣にいる猿のような小男にも、一切の弱気は見受けられない。獲物を狙う獣のように、その姿には精気が満ちている。

その二人の頭上に、影がもう一つある。二人とおなじ緋の上着を片袖しか通さずに羽織り、伸ばした金の髪が泥だらけなのを気にするそぶりもなく頭のてっぺんで結んでいる。つるりとした顔は二十にも三十にも四十にも見え、青い瞳を見開いたまま一点を凝視する姿は、奇妙な鳥を思わせる。

男がいるのは二人がひそむ草むら近くにそびえる樹上であり、その両手には大弓をかまえ、先ほどからきりきりと弦を鳴らしている。

頭上にちらりと視線をやりそれを確認したアルズレッドは、背後に声をかける。

「見つかるんじゃないぞ、ガキ」

そこにいるのは少年だ。

歳は、十をわずかに越したところか。森の木陰にまぎれるような漆黒の髪と黒い瞳はアルズレッドとおなじ色だったが、受ける印象はまるで異なっている。アルズレッドの瞳が極天の星だとしたら、少年の瞳は星のない夜そのものだった。

肩のところではつさりと切りそろえたおかつば頭は、育ちのよさというよりは覇気のなさはかりを感じさせる。木々のあいだをうす汚れた貫頭衣をずるとひきずって歩き、そこに住みついているかのようになじんでいる姿は、森の小動物のようだ。

「わかったよ、アルズレッド」

少年はうなずきもせず、無表情にこたえる。

小男はそれに不満げなおおげさに眉をひそめた。「戦場にガキつれてくんじゃねえよ」

「放っておけ。勝手にいてきやがるんだ。——そろそろだぞ」

アルズレッドが視線をよりいっそう鋭くさせる。

獸の凶眼きようがんと呼ばれるその目つきは、まさしく野の獸そのもの、あるいはそれ以上の暴力の臭いを、隠そうともせず、漂たふわせている。

「しかし何度考えても笑わせてくれる作戦だな」

敵である『天翔団』三百がすでに山道の大半をぬけたことは斥候せつこうにより判明している。そこからダツの都へとたどりつくには、まっすぐ西方の隘路あいろをぬけるか、南の森をつききって迂回うかいするかだ。

隘路には防御柵が築かれ、容易に通ることはできないようになってはいるが、所詮はただの防御柵だ。

砦とりでや関所ほど守りは固くなく、多勢によって攻められれば強引に突破されておしまいだ。かといって防御柵を全力で守っても、森に迂回されてしまえば素通りされることになってしまう。

必然として、部隊長アルズレッドは決断をくだした。敵に防御柵を迂回させ、森で待ち伏せする。

理屈としては単純で隙すきはない。問題は一つだけ。待ち伏せしている人数だ。

「オレさま、クソ狼、バルダーに、むこうのダツデイン入れて四。どうかぞえても四人しかいねえな」
小男のいう通り、それがアルズレッドの率いる待ち伏せ部隊の戦力のすべてだ。

「ガーンのおっさんはあれで有能だ。ありったけの戦力で防がなけりや、防御柵がもつわけがない」

その理屈も正しい。はじめから敵の半分しか数がない以上、中途半端に分散させてはどちらも簡単に潰つぶされてしまうだけだ。主力は防御柵において、待ち伏せは少数精鋭せいえいでおこなう。いたって正常な戦術だ。三百の敵に対して待ち伏せ部隊が四人、という一点に目をつぶれば、だが。

「クソ狼は数の大小もわからねえってか」

「嫌なら尻尾しっぽまいて家に帰れ」

「ケツ、黒狼、さまは一人でも勝てるってか？
三百を相手に？」

嫌味っぽく顔全体を歪ゆがめている小男に、アルズレッドは鼻で笑ってこたえる。

「くだらん二つ名で呼ぶな。おれはアルズレッド・リーイン。いずれ竜をも殺す英雄になる男だ。三百も五百も関係ない」

「はいはい、クソ狼さまはお強いことで……」

と、その瞬間、小男の赤ら顔からふざけた色が消える。アルズレッドは身をしずめ、愛剣を握る右手に力をこめた。

地響きが強くなった。人間の集団が走る音だ。

(きたか)

彼は恐怖ではなく、歓喜をもってこれを迎えた。

戦いが、はじまるのだ。

木々にまぎれる視界のすみに敵部隊があらわれる。部隊の先頭に立つのは、中背だが戦場の臭いがしみついていることが一目でわかる男だ。

「走れ！ 森をぬければ数の利はこちらにある！」

そう鼓舞する男の、豊かな口ひげが目立つ顔には見覚えがある。

(いつも先頭に立つことは評価してやってもいいん

だがな、逃げ腰のおっさん)

彼は左手をわずかにあげる。樹上の男が鳥のような目を光らせ、弓弦を最大にひいたところでピタリと止める。

(まだだ……全部隊が森に入るまで……)

無骨な鎧に身を包んだ男たちの集団が、またたく間に彼らのひそむ場所へと近づいてくる。発見されようものなら、圧倒的な不利は否定できない。戦いを制するのは、原則的には数だ。百倍の戦力差をくつがえす力など、人間にはない。

(普通の人間なら、な)

彼は不敵に笑い、そして左手をおろした。

瞬間、集団の行く手に、なにかが立ちふさがる。

「うわあ！ な、なんだあれは！」

男たちは声をあげた。木立の合間に立つそれは、両手に握る戦斧に気づかなければ、巨大な熊としか見えなかつただろう。それほどの巨体であった。

だが、熊であつたほうがまだよかつたと、男たち

は直後に思ったにちがひあるまい。その戦斧がふりおろされると、近くにそびえていた幹に食いこみ、一撃でもって轟音ごうおんをたてて木が倒れはじめたのだ。

「アアアアアアルウウウウウウ！」

そして、熊のような大男は、森を震ふるわせるほどの大声をあげた。三百の男たちの足が、恐怖というよりはおどろきでピタリと止まる。

それを確認した瞬間、樹上の男は弓弦にためた力を解放した。使い手のもとを離れた矢は、うっそうとしげった葉のあいだをすり抜けて、狙う場所へ、大木の根元に巧妙こうみょうに隠された縄なわのもとへとまっすぐに飛んでいき、それを断ち切った。

三百の『天翔団』に、矢の雨が襲いかかる。

「な、なんだこれは！ 敵が伏せていたとでも？」

信じられないとでもいうように悲鳴をあげるのも無理はない。大軍が伏せていた気配けいはいなどなかったというのに、降りそそぐ矢の数は百にも達するほどだ。

「ずいぶん仕掛けたものだな、サイム」

「あんまり遅えからハリキリすぎちまった」

それは小男の仕掛けた罠わなだ。木の枝と蔓つるとでこしらえた急造のそれは、すべてを結んだ縄を切り落とすことよって、ただ一度だけ、一斉に矢を放つことができ。罠作りの達人である小男は、森に入った早朝から昼下がりのいままでのあいだに、百を超える装置を仕掛けてのけたのだ。

無論、威力は弱く、狙いをさだめることなどできない。ましてや森のなかだ。木々にさえぎられ、敵に届くことのない矢も多い。だが、それで十分だった。この罠は敵の死傷を目的としたものではない。一瞬でもいい、敵に大軍がひそんでいると誤解させ、混乱させることにある。

（罠作りの才能ばかりは認めねばなるまいな）

アルズレッドは決して本人にはいわない小男への賞賛を胸に秘め、全身に力をこめた。三人の部下は自分の仕事をこなした。あとは、部隊長の仕事だ。

「止まるな！ このまま突破……クソッ、無理か」

敵の首領「逃げ腰」ガーンは前方の大男が単身なのを見切ったのだろうが、突然の巨体の出現と矢の雨に部隊は浮き足だっている。すかさず引き返したのは、部隊の中央に戻り、立て直しをはかるために相違ない。冷静で的確な判断といえよう。

(が、遅い)

混乱はすでに生まれている。

ならばあとに残るのは、獣に食い荒らされることを待つばかりの獲物の群れだ。

ガーンが部隊の統率を取り戻すよりも早く、黒い獣は敵部隊の横腹へと喰らいついた。アルズレッドが一人の男の膝から下を一瞬にして斬り落としたのだ。斬られた男がそれに気がつくのと、「黒狼」の牙が次の敵を捉えるのと、はたしてどちらが速かったか。

敵からしてみれば、理不尽でしかないだろう。彼らの目にうつったのは、前方の草むらがにわか揺れただけのことだ。なにかが飛びだしてきたのだと

認識したときには、脚から力はうしなわれ、積もった落ち葉のなかに頭から落ちていく。あとは遠ざかる赤い背を呆然と眺めるだけだ。

「て、敵襲だあ！」

ようやく最初の声があがったとき、彼の愛剣はすでに三本の脚を斬っていた。そして声をあげた男の脚で四本目となる。

「敵だと？ 姿が見えな……いや、「黒狼」か！」

ガーンが即座に声をあげるのへ、彼は内心で賞賛をおくる。

(ほう、さすが「逃げ腰」のおっさんだ。おれの姿など見えていないだろうに、よく気づいた)

走る彼の姿勢は低い。全身をしずませ、ひどい前傾姿勢のまま走るそれは、まるきり四足獣の疾走だ。倒れる勢いを利用した走法は、立ち止まった瞬間にころげるため、自身でも容易に止めることはできない。そしてその勢いのままふるわれる彼の刃は、もっと低い。

大國の正規軍ならともかく、傭兵団の装備は自前のものだ。防具が十分でないことは珍しくなく、脚の守りをおろそかにする者は多い。人の意識は自然と胴より上に集中し、視線もなかなか下半身にまではないきわたらない。

アルズレッドの刃は、その間隙を衝く。徹底して脚を狙うのだ。無防備な者はすねを、すね当てをつけている者は膝、足首、どこでもいい、防具の隙間を見つけ、容赦なく斬る。彼の剣は肉を斬り、膝を割り、ときに骨をも両断する。

愛剣とのつきあいは、もう五年にもなるだろうか。はじめはその刀身の重さとくせの強さに辟易もしたが、いまとなつては欠かすことのできない相棒だ。(あつかいの難しいやつにや気をつけろよ。慣れちまつたら、そこがたまらなくなる)

不覚にも養父の言葉を思いだし、かすかに眉をひそめる。悔しいが、たしかに認めざるを得ない。仲間のだれもが「そんなのかついで戦場なんて、勘弁

してくれ」と呆れるこのじゃじゃ馬がなくては、もはやどんな戦いもおぼつかない。

風が乱れ、前髪の揺れかたがわずかに変わる。彼が敵の動きを察するにはそれで十分だった。

「くたばれ狼野郎！」

言葉とともにふりおろされる刃をかわすと、眼前にまた新たな脚があらわれる。革の長靴をはいているが、膝とすねのあいだが空いている。

(狙つてくれつてことだな)

大きな弧を描いて、愛剣がはしる。一見するとただの長剣にしか見えないその刀身には、先端部に黒王鉄と呼ばれる重い金属が埋められている。重さの偏りゆえに、普通にふれば重心を崩すため、大きく弧を描かせて遠心力を利用する必要がある。そのあつかいは斧や鉞にも似ているが、彼の愛剣はあくまで剣であり、力任せに断ち割る武器ではない。

アルズレッドのふるった刃が、敵のすねに食いこむ。瞬間、彼は刃をひきながら手首を返した。する

と、愛剣はやすやすと骨ごとすねを両断する。

これが愛剣、唯一の正しいあつかい方だ。斧の重さと剃刀かみそりの鋭さ。習得には慣れが必要だったが、わかつてしまえば面白いようによく斬れる。

「次！」

高揚したまま叫ぶと、眼前に鋼鉄の壁が出現した。

いや、壁ではない。大盾おおたてだ。彼の行く手をさえぎるように大盾がおろされているのだ。脚を狙うはおろか、盾をかまえる敵の姿は完全に隠れて見えない。(無防備な奴ばかりじゃないということか。が、馬鹿にはかわりないな)

彼は盾が見えた瞬間、即座に横に跳んだ。周囲には無数の木々がそびえている。その一本の幹に片足がつくと、それを蹴けって高く跳ぶ。跳んだ先にあるべつの幹を蹴り、さらに高く。そのまま大盾より高くまであがると、くるりと身をひるがえして鮮やかに跳びこえる。そして回転の勢いをそのまま利用した蹴りの一撃が、敵の肩に突き刺さる。

彼の両脚はなめし革の長靴に包まれている。だがその足先にはよく研とぎ澄とまされた鉄甲がついている。ただでさえ貫くような鋭さをもって放たれる彼の蹴りにこの鉄甲があわさると、もはや打撃ではなく剣突にもひとしい。苦痛に顔を歪めて盾をとりおとす敵の頭をもう片方の足で蹴り飛ばし、その反動で刺さった足を引きぬくと、着地のついでにべつの敵の腕を斬り落とす。

またたく間に七人を斬り伏せ、敵部隊の中ちゅうぶたい枢しゅうにたどりつく。指揮官である、逃げ腰にげこし ガーンのもとまで、あと数歩の距離だ。しかし彼の四方にはすでに身構えた敵が四人。

「させるか、黒狼くろろう！ かかれ！」

ガーンが叫ぶと同時に、一斉にアルズレッドに襲いかかってくる。彼とても、四人同時は分ぶが悪い。身をはずめて前方の二人に集中する。二人とも、脚甲で下半身をしっかりと防護している。

だが、そんな防具は彼には関係ない。

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。